

〈1968年〉の神話化に抗して

◇西川長夫『パリ五月革命 私論 転換点としての68年』を読む◇

「68年5月」（5月革命）から40年以上を経て刊行された西川長夫『パリ五月革命 私論』（2011年、平凡社）。本書は、1968年～1969年にかけて政府給費留学生としてパリに滞在した著者が、「私自身の目と身体と脳裏に刻まれた68年革命の出来事」（本書 p.10-11）を記した濃密なドキュメントである。このドキュメントは「同じ5月を生きた世代に、そしてその後に生を受けた若い世代の人々に通じる普遍性をもちうること」（p.14）を期待して書かれている。つまり、現在における「革新的思想の再起動」（そで文）として世に送り出されたのだ。

2000年代に入り大量に出版され続けている〈1968年〉論は、〈1968年〉の神話化、あるいは平板な歴史語りへと当時の出来事と経験を押し込めていないだろうか。たとえば、「あれは失敗だった」という今日の高みからの無惨な評価であり、「マイノリティとの関係性が欠落した運動だった」といった一面的な評価が多いのではないだろうか。今必要なのは、〈1968年〉を大文字の歴史／出来事として考えるのではなく、〈1968年〉の多様な出来事・経験の複層状況を明らかにすることだろう。また、〈1968年〉を思想・運動のピークとして特権化せずに、その前後の思想・運動との持続や転形のあり様を具体的に検証することではないだろうか。つまり、〈1968年〉の神話化に抗する作業が求められている。

このような問題意識から、『パリ五月革命 私論』の合評会を開催したい。本合評会では、本書が描いた「パリ五月革命」の様々な出来事を批判的に読み解いていきたい。具体的には、当時の大学制度への学生の異議申し立てと、そこから派生した多様な主体・思想・運動の形成と発展のあり様（ベトナム反戦運動、人種差別反対運動、知識人論、文明批判、世界各地の運動との連帯を求める実践等）、「68年5月」を記述する著者の方法論、そして本書が今日の世界・日本の状況に対して提起している課題などを、批判的に検討したい。合評者、そしてフロアの参加者が、それぞれの視点や研究・活動と『パリ五月革命 私論』との接点や論点の広がりをも提示・共有する場をつくりたいと思う。

▼日時： 2011年11月18日（金）16:30-19:30 （※終了後、懇親会）

▼会場： 立命館大学 末川記念会館 第2会議室

▼内容：

・合評者による報告

箱田徹（立命館大学衣笠総合研究機構 ポストドクトラルフェロー）

橋口昌治（立命館大学衣笠総合研究機構 ポストドクトラルフェロー）

番匠健一（立命館大学先端総合学術研究科 院生）

・西川長夫氏からの応答

・フロア参加者を含むディスカッション

・司会・コーディネーター： 大野光明（立命館大学先端総合学術研究科 院生）

▼参加費無料・事前申し込み不要

▼主催： 立命館大学先端総合学術研究科 院生プロジェクト「植民地主義研究会」

<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/gr/gsce/k/koubo2010-1.htm>（連絡先：大野 mitsuakick@hotmail.com）

▼共催： 科研費 若手研究 B「ミシェル・フーコーの方法論の再検討」（代表者：箱田徹）

